

昭和 SPレコードで迎れば

愛馬進軍歌

SPレコード収集家■城内 實

(一)

先日秋の恒例の天皇杯という日本競馬界のメインイベントがあつた。競馬といつても筆者にとっても賭事をやるような余裕はなく、築四十年にもなる今時珍しい暮らしを余儀なくされている。そんな筆者にも疾走する競争馬の姿は造形的に大変美しかつた。競走馬というサラブレッドの最高品種に魅せられる人々の気持ちがなんとなく分かるような気がした。

宝籠でも当たつたら一度は自分の馬を飼育してみたいと思つたこともあるが、悲しいかな薄給で二人の乳飲み子を養うのが精一杯である。

(二)

馬という動物は今では非日常的な存在であるが、戦前はまだまだ日常生活に溶け込んでいた。明治時代には鉄道馬車というものがあつた。馬にとって代わった自動車の出力に「馬力」という言葉が使われているのも当時の名残である。ちなみに馬力はドイツ語の P S = Pferdestärke に由来する。

現代においては競馬以外に馬というものは一般大衆から遠い存在であるが、宮内庁には車馬課というのが存在している。車馬課には、一九三〇年代にドイツで生産され戦前から戦後にかけて御料車として活躍したメルセデス・ベンツ七七〇が何台か保存されているという。その内

の一台はドイツのメルセデス・ベンツ博物館に寄付され、見物人の目を引いている。この自動車はタイヤに木製スポーク（車輪の輻）を履かせており、これも馬車の時代の名残である。

このメルセデス・ベンツ七七〇は、車内の西陣織の玉座に鎮座された昭和天皇のみならず、第一次世界大戦後オランダに亡命したヴィルヘルム二世やナチス高官の快適な移動手段として使われた。

またそれに先立つて栗林課長の指導の下で松竹の軍馬PR映画「征戦愛馬譜—晩に祈る」が制作され、その主題歌「晩に祈る」、「愛馬花嫁」がヒットした（昭和十三年三月発売）。伊藤久男が歌う「晩に祈る」の三番の歌詩は有名である。

ああ傷ついた この馬と
飲まず食わずの 日も三日
捧げた生命 これまでと
先の大戦で日本が米国に負けた一因として彼我の工業力の差があげられる。T型フォードの生産で自動車が庶民にも手が届くようになつて、米国と比べ、日本では自動車はほんのじく一

部の上流階級の奢侈品であった。田舎ではまだまだ馬が農耕や移動のための動力源となっていた。殊に大陸では軍馬が自動車やトラックの代わりに大活躍した。

本誌では留守晴夫氏が硫黄島で玉碎した栗林中将の連載をさせているが、実は栗林と馬は切っても切れない関係にあつた。

栗林中将が陸軍省の馬政課長（当時大佐）の時、軍馬への関心を一般民衆に高めるべく愛馬の歌詩を一般募集した。それが「愛馬進軍歌」である（昭和十四年三月発売）。

西条八十作詩の「愛馬花嫁」の三番もなかなか良い。

雨の露營へ 弹薬積んで
朱に染まつて 来た馬みたら
みんな泣いたと 戰地の便り
黒馬も早よなれ 名譽の馬に

攻めて進んだ 山や河
執った手綱に 血が通う

昨日陥した トーチカで
今日は仮寝の たか軒
馬よくつすり 眠れたか
明日の戦は 手強いぞ

(四)

「愛馬進軍歌」は「愛國行進曲」と同じくレコード各社の競作であつたが、同じ曲でも歌手や演奏者が異なると曲調もだいぶ異なるところがおもしろい。

日本コロムビアは霧島昇、松原操のおしどり夫婦に歌わせ、松ビクターは我らのテナー藤原義江盤と徳山璉・四家文子盤を発売した。キングは朝鮮出身の歌手永田絃次郎と声楽家長門美保のコンビ、ポリドールは東海林太郎、ティチクは藤山一郎、と各社が誇る代表的歌手を起用した。

「愛馬進軍歌」の歌詩の一部を紹介する。

共に死ぬ氣で この馬と
くにを出てから 幾月ぞ

彈丸の雨降る 濁流を
お前たよりに 乗り切つて
つとめはたしたあの時は
泣いて秣まぐきを 食わしたぞ

(五)

第二次近衛内閣の下で大政翼賛会が発足し、新体制が叫ばれるようになつた直後の昭和十六年一月、東宝映画主題歌の「馬」と「めんこい子馬」が日本コロムビアから発売された。

駆けて行こかよ 丘の道
ハイド ハイドウ 丘の道
オーラ

(六)

この山本嘉次郎監督の映画のストーリーは、高峰秀子演ずる貧しい農民の娘いねの愛する仔馬が二年後に軍馬徴用となり遠い戦地に送られていくというものである。

「めんこい子馬」は当時の代表的な童謡でもあった。戦前生

各々一番の歌詩を紹介する。

明けの野風にたてがみ吹かせ
堂々鼻面はなづら 心が勇む

さあさ鍛えよ栗毛も鹿毛も

明日は召されて誉れの軍馬

(音盤からの聞き取りによる)
以上紹介した軍馬に関するレコードから分かるように、当時の日本人は軍馬を単なる消耗品としてではなく、人間と同じ健気な存在として扱い、遠い戦地で命運を共にしたのであつた。

